

にしむくさむらい

別役実

女 女 男 男 男  
2 1 3 2 1

登場人物

下手に電信柱。その下にベンチ。あとは何もない。夕方である。風が吹いている。犬の遠吠え。夜まわりの拍子木の音と《火の用心》の声。

女1が下手からリアカーにガラクタを積んで現われる。舞台中央でとまり、リアカーからむしろをおろして、中央やや上手寄りに敷く。同じく蒲団をおろし、むしろの上に敷き、寝床をこしらえる。最後に枕をとりだして、そこに置く。

仕事の最中に、カバンとコーモリ傘をもった男1が上手から現われ、それを見る。

男1 こんばんわ。

女1 (仕事をしながら) こんばんわ。

男1 風が出てきましたよ。

女1 ええ、いつもです。いつもこの時間になると、風が出てくるんです。

男1 今夜は二の酉ですか、人が出ていましたが……。

女1 ええ……。

男1 (下手へまわりこんでベンチに坐り) 何をしてらっしゃるんです……？

女1 いえ、すみません、ちょっと手伝っていただけます……？

男1 いいですよ。何をすればいいでしょう？（カバンとコーモリ傘を置いて立ち上る）

女1 （リアカーの上の大きな石を指して）これ、おろしてそこに運びたいんです。

男1 わかりました……。けど、どうすればいいかな……？

女1 そっち持って下されば、私こっち持ちますから……。

男1 そうですか、では……。

二人、石を持ち上げて、むしろの上に、よいしょと置く。

女1 どうも、すみません。これで結構です。（石に、ぶら下げるための鉤をつけながら）それから、その……電信柱のところに、ロープが巻いてありますでしょうか？

男1 ロープがですか……？ ええ、ありますね。

女1 それ解いて、少しゆるめて下さいますか……。

男1 解いてね……。こうですか……？

男1がロープをゆるめると、ちょうどむしろに敷いた寝床の枕元のあたりに、空から鉤のついた滑車が、ゆっくりおりてくる。

女1 (滑車を見上げながら) もう少し、もう少し、もう少し……はい、結構です。そのまま、それ持って下さいね。

男1 いいですよ。いいですけど……何なんです、これは……？

女1 手、はなさないで下さいよ。はなすと、全部これ、はずれてしまいますから……。 (滑車の鉤に石をひっかける) どうも……、ありがとうございました。 (電信柱のところへもどって、男1からロープの端を受け取る) おかげで助かりましたわ。

男1 もう、いいんですか……？

女1 ええ、これで、これを引っぱれば。 (引いてみるが、少し重い) すみません、もう一度手を貸して下さいます？

男1 いいですよ。引っぱるんですね？

女1 ええ……。

二人で引っぱると、むしろの上の石が、ゆっくりと空の方へ持ち上る。

女1 はい、ええ……。こんなもんで結構です。ちょっとこれ、このまま持って下さいね、度々す

みませんけど……。

男1 わかりました……。

女1 重いから気をつけて……。

男1 大丈夫ですよ。

女1 (むしろの枕が、石のちょうど真下にくるよう、位置を調節する) はい。それじゃそれ、そのままもう一度、ゆっくりおろしてみてください。

男1 おろすんですね……。

女1 ゆっくりですよ、危いですからね。

男1 ええ、わかっています……。

女1 はい、ゆっくり、ゆっくり……、はい、はい。いいですよ。そこでとめておいて下さい。(もう一度位置を直す) 今、ロープ、動かしました？

男1 動かしましたって……ゆるめただけですよ。

女1 おかしいわねえ、上げたり下げたりする度に、位置が動くのかしら……？ いいわ。上げて下さい。

男1 はい。

女1 ゆっくりですよ。それから、動かさないように上げて下さいね、ふらずに……。

男1 ええ、そうしてるんですがね……。

女1 (石の高さを見ながら) えーと、はい。そうね、その辺でいいわ。そうしたら、それ、もとのよう

に電信柱にゆわえといて下さい。(あたりに残された不要のものをリアカーに積みこむ)

男1 (ロープを電信柱に結びながら) こんなもんでいいですかね……。

女1 (リアカーを電信柱のところまで運び) しつかりゆわえとかなくちや駄目ですよ。今度は重くなつているんですから……。

男1 もちろん、わかってますが……。しかし、何なんです、これは……？

女1 (リアカーから、ほうきとちりとりを出して、あたりを掃除しながら) ええ、うちの人が考えついたんですけどね、乞食をつかまえる仕掛けなんです。

男1 乞食をつかまえるんですか……？

女1 ですからね、むこうから乞食がやってきて、ここに寝ますでしょうか？ そうしたら、そのロープを切るんです。

男1 ははあ、なるほど……。

女1 雀をとるワナのこと知っていますか。あれから思いついたんですよ、うちの人は。私、それは知っているんです。言えば、そうじゃないって言いますけどね。それはそうなんです。私、あの人が何を考えてるかなんてこと、一から十まで知っていますわ。夫婦ですもの。夫婦っていうのはそういうもんです。そうじゃありません？

男1 ええ、まあ、そうですね……。じゃあ、御主人が考えつかれたんですか、これは……？

女1 そうなんです。でも、この……枕のこと思いついたのは私ですよ。だって、枕がなくなっちゃ、こ

つちに足向けて寝るかもしれないし、そうだとしたら、石落ちてきても、せいぜい足くじくだけじゃありませんか。そうでしょう？

男1 そりゃ、そうです。そりゃ、そうですねえ……。

女1 うちの人、よくいろんなこと考えつくんですが、いつもそういう細かいところが駄目なんです。

男1 なるほど……。しかし、何ですが……。何故乞食を……やるんです？

女1 だって、乞食じゃなくちゃ、こんなところに寝ませんもの。それ、触らないで下さいね、位置きめてあるんですから。

男1 ええ、わかってます。ちよつと見ただけです……。

女1 それからあなた、乞食が来たら隠れて下さいよ。

男1 隠れる？ どこへです？

女1 いえ、来てからでいいんですよ。来たら私が合図をしますからね。そうしたら、どこかその辺に……。 (ちりとりでごみを集めようとする)

男1 私がお持ちしましょう。(ちりとりを持つ)

女1 すみません、本当に、何から何までやっていただいて……。 (男1の持つちりとりに、ごみをはきよせ) ちよつとそれ、一度持ち上げて下さいます？

男1 そうですね。(ちりとりを持ち上げて、入ったごみを手元に寄せる)

女1 ええ、それでもう一度ここに置いて下さい。うちの人が、いればいいんですが……。

男1 御主人、どうかなすったんですか？

女1 いえ、このロープ張るまではやってくれたんですけどね……。ありがとうございます、あと、私やりますから……。 (ごみをリアカーの方へ) そのうちに、いつの間にか、どつかへいなくなっちゃったんですよ……。 (上手の方を探し気味に見る)

男1 いなくなっちゃったんですか……？

女1 ええ、いつもそうなんです。あの人は、何か考えつくところまではいいんですが、最後のところになると、いつも私がやってやらなくちゃいけないんです。 (ごみを紙袋の中にしまう)

男1 でも、それはどういうことなんでしょ……？

女1 駄目なんですよ、あの人は。積極性がないんです。この前荷物を整理してましたら、あの人の小学校の時の通信簿が出てきたんですけど、そこにも書いてありました。担任の先生が、どうも少し、物事に対する積極性が足りないようだって……。 そうなんです。誰が見てもそうなんですよ。あの人には、物事に対する積極性が欠けているんです。 (仕事をすませて、ベンチに坐る)

男1 しかし、何じゃないですか……。、もしかしたら、いやになったんじゃないんですか……？

女1 何がです……？

男1 いえ、ですからね、こうしたことをやることについて、急にこの……。、いやになって……。

女1 いえ、そうじゃないんですよ。私にはわかっているんです。あの人はただ、恥かしがってるだけなんです。

男1 恥かしがって……？

女1 あの、すみませんが、もしいらっしやるんでしたら、こちらの方に坐っていただけます？ そ  
こだと目立ちますから。

男1 ああ、いえ、私も、もうそろそろおいとましなければいけないんですが……。 (時計を見て、カ  
バンとコーモリ傘を持ち、下手へまわりこみ) しかし、何ですか、あと奥さんおひとりで……？

女1 ええ、しかたありません……。

男1 でも、どうなんでしょう……。 やっぱりこれは、どうしてもやらないと、まずいんですか……？

女1 何をです？

男1 ですから、この……乞食を、何するという……。

女1 しようがないんです。うちの人が自分でやれば一番いいんですが、いけませんからね……。あの  
人のためなんです。私、あの人に、何とか一人前になってもらいたいと思って……。

男1 ははあ。

女1 坐っていただけですか？

男1 いえ……。 ああ、そうですね。じゃ、ちよつとだけ……。 (坐る)

女1 あの人、会社をやめてしまったんです……。

男1 御主人がですか……？

女1 ええ、私、知りませんでした。三ヶ月も、会社へ行くふりをして家を出たままどこかであらぶ

らしてたんです。

男1 はあ……。

女1 私、言いましたよ。そんなにいやなら、もう会社へは行かなくてもいいって。そのかわり、あなたが本当にやりたい仕事を見つけて、それに一生懸命打ちこんでほしいって……。

男1 なるほど、なかなか言えないことですよ、そういうことはね……。

女1 失礼ですけど、煙草お持ちですか……？

男1 ええ、あります……。

女1 すみません、一本だけ……。

男1 どうぞ、どうぞ……。 (一本渡し、マッチで火をつけてやる)

女1 ちょっと、切らしてしまったもんですから……。

男1 遠慮なく。沢山ありますから……。 (マッチの燃えがらを捨てようとして、ややとまどう)

女1 それ、こちらにいただきますわ。

男1 これをですか？

女1 ええ。(受け取って、リアカーの所へゆき、灰皿を持ってきて、捨てる)

男1 色んなもの、お持ちなんですね。

女1 全部、あるんですの。

男1 全部……？

女1 私達、ゆうべアパートを追い出されたんです。ですから、全部……。

男1 だって、それじゃあ……。

女1 靴こちらにお預りしましょう。

男1 あ、どうも……。

女1 あの人は、何かを発明する仕事をしたいって言い出しました。子供の頃から、発明家になりたかったらしいんです。

男1 発明家に……？

女1 しようがありませんよ。私は、とにかく、一生懸命やってほしいって、それだけ言いました……。

男1 で……？

女1 色々やってるようでした……。でも、何故なんでしょうかね、私にはなんにも見せてくれないんです。

男1 完成しなかったんじゃないですか。だから、完成したらお見せしようと思って……。

女1 そうじゃないんです。あの人は、何かが出来上ったとたんに、恥かしくなって、壊したり、隠したりしちゃうんです。

男1 壊しちゃうんですか……？

女1 それが欠点なんです、あの人の……。

男1 しかし、それは奥さん……。

女1 (立ち上ってリアカーの方へ行きながら) ひとつだけあるんです。私偶然手に入れたんですが……。  
(ふと立ち上って) 何か、足音がしました……？

男1 そうですか……？ 私は聞きませんでした……。それじゃ、奥さん、何ですが、私、もうそろそろ……。

女1 ええ、でも、これちょっと、ごらんになって下さいます？ うちの人が発明したんです。(サ  
ンダルを片一方渡す)

男1 何です、これは？

女1 サンダルなんです。ですからね、こっちからも、はけるようになってるんですの。

男1 ははあ、なるほど……。

女1 お便所なんかに置いとくと、こっちからはいてって、そのまま向きをかえずに出てこられるんです。

男1 いやあ、便利じゃないですか。これは、奥さん、大変なもんですよ。仲々普通じゃ思いつけないんじゃないですか、こういうことは……。

女1 そうなんです。私もそう言ったんですよ。それで、すぐ特許をとった方がいいって言ったんです。すが、あの人、行こうとしないんです……。

男1 何故……？

女1 わかりません。明日行く、明日行くって言うばかりで……。

男1 しかし、惜しいじゃありませんか、せっかく……。

女1 ですから、私、知ってる人に頼んで、聞いてもらいました……。

男1 特許庁に……？

女1 ええ。そうしたら、これと同じものが、もう申請してあったんです……。

男1 同じものが……？

女1 ええ……。

男1 同じようなこと考える人が、いるもんなんですわね……。

女1 もし、あの人が発明してすぐ持ち込んでいたら、間にあっただかもしれないんです……。

男1 そうですか……。

風の音。犬の遠吠え……。

女1 あら……。

男1 何です……？

女1 石がゆれてるわ……。

男1 本当だ……。風のせいですかね……？

女1 (立ち上って、石に近づいて見上げる) どうしたんでしょ……？

男1 奥さんも、大変ですねえ……。

女1 あなた、今、そのロープに触りました？

男1 いえ、とんでもない。私はここにいましたから……。

女1 あんな重いものが、風で動くかしら……？

男1 そうですねえ……。しかし、それ以外には考えられないんじゃないんですか……。

女1 ……。(じっと見上げている)

男1 (立ち上って) じゃあ、奥さん、私は、これで……。

女1 私、どうしたらいいかしら……？

男1 どうしたらって……？ ああ、それですか？ いや、私もそう思ってたんですがね、やっぱり、

おやめになった方が……。

女1 いえ、うちの人のことなんです。

男1 ああ、御主人の……。

女1 私達、もう、住むところもないんです……。

男1 そうですねえ……それは、何ですが……、しかし、そのうちに何か、いいこともあるんじゃないですか……。好きな仕事なんだし、一生懸命やれば……。

女1 (何かを聞きつけ) 静かに……。

男1 何ですか……？

女1 (ベンチに引き返して) すみません、もう一度、ちょっと坐って、動かないで……。

男1 どうしたんです……？

女1 じっとして……。

下手から、赤んぼをおぶった女2が、ものうく子守歌を歌いながら、ゆっくり現われ、そのまま、上手に消える。

女1 行ってしまったわ……。

男1 でも、あれは違いますよ。

女1 違う？

男1 家内です。

女1 奥さん、あなたの？

男1 ええ、私を迎えに来たんでしよう。

女1 でも、それじゃあ……。 (立ち上る)

男1 いいんです。いいんですよ。公園まで行って、私か居ないとわかれば、引き返してくるでしょうから……。

女1 お気の毒じゃありませんか。

男1 いつもなんです。いつも、私が遅いと、公園まで迎えにくるんです。

女1 寒いのに……。

男1 私も、会社が退けると、たいてい公園で、時間をつぶしていますから……。

女1 何故……？

男1 え……？

女1 何故すぐうちに帰らないんです……？

男1 何故って……。いや、別にどうってことはないんですがね……。ただ、なんとなく。

女1 あの人もそうでしたよ……。

男1 御主人も……？

女1 会社が退けると、あの公園のベンチで暗くなるのをじっと待っているんです。何もしないで

……。暗くなって、あたりにそろそろ灯がつきはじめる頃になると、やっと腰をあげて帰ってくるんです。

男1 そう……。ですね、私も、まあ……。

女1 何故なんです？

男1 何故って……。そう、何故ですかね……。ただ、明るいうちに帰ってしまうと、家内も私も、  
どうしていいかわからなくなってしまいうんですよ……。何ていいですかね、何となく気づまりで

……。

女1 失礼ですけど、あなた本当に毎日、会社へ通っていらっしやるんですか？

男1 通っていらっしやるんですかって……。通っていますよ。だって……。何故そんなことを聞くんです？

女1 本当に……？

男1 本当ですよ。一体何を言うんです。そりゃあ、あれですよ、それほどきちんきちんとじゃありませんけどね、そりゃあ、病気をすることもありますし、それほどでなくても、何となく気分が悪くて、何することもありませんが。

女1 今日もいらしたんですか？

男1 だから……。だから、そうですよ、今日は休みましたけど……。しかし、それは、何じゃないですか、今日はちよっと気分が悪くて、もしかしたら風邪なのかもしれないと思って、それで

……。だから、そうですよ。もちろん、電話すればよかったんですが、あいにく細かいのがなくて……。そういうことだって、ないわけじゃないでしょう。でもそのかわり、明日は行きますよ。明日はもうそろそろ行かなくちゃいけないんです。だから……明日は行きます。今、そういう風に思

ってるんじゃないかもしれませんか。そうでしょう？ そういう風に今思ってる場所なんですから、そういう風な言い方はよして下さいよ。だいたい、そうじゃありませんか。これは、私のことなんですから。私のことをそんな、そういう風な言い方で何しなくたって……。

女1 あの人もそうでしたよ……。私が言うとは必ず、明日行くって言うんです……。

男1 だって、そりゃあ、奥さん……。

女1 いいえ、私には、あなたの方のことは何から何までわかっているんです。そうですよ。会社へ行くのがいやになるにつれて、家に帰るのもいやになってくるんです。暗くなって、灯りがついて、あたりが何となくあわただしくなると、昼間の生活の匂いが消えてしまうまで、公園のベンチでじっと待つようになるんです。そうなるからはじめて、まるで泥棒猫のように、こっそり帰ってくるんです。

男1 しかし奥さん、私は違いますよ。だって私は、行くんですから。本当に私は、明日行きます。

そう、決心したんですよ。明日は行くこうって……。だから……。

女1 ねえ、何故なんです？ 教えて下さい。何故あなた方は、会社へ行くのがそんなにいやなんです？ 会社に何があるんです？ どんないやなことがあるんです？

男1 いやいや、奥さん、私に聞かれても困りますよ。だって私は……。

女1 私、責めているんじゃないんですよ。ただ、教えてほしいんです。私にはどうしても、わからないんです、何故そんなに会社がいやなのか……。

男1 ……。

女1 だってそうでしょう？ 当り前なら、朝出掛けて行って、あいさつをして、決りきった仕事をして、さよならって帰ってくるだけのことじゃありませんか。そりゃあ多少は、意地の悪い人もい

るでしょうし、仕事に失敗することもあるでしょうけど、そりゃあ当然でしょう？ 幼稚園じゃないんですから……。

男1 そうなんですがねえ……。

女1 何故なんです？ ね、教えて下さい。どうしてそれがいやなんです？ 何でもないことじゃありませんか？

男1 何でもないことなんですよ。本当にそれは何でもないことなんです……。だから、私にも何故か、よくわからないんですよ……。ただ、ある日突然、ふとそれがいやになるんです……。そして……。会社を休んでしまう。もちろん、出勤するふりをして家を出たままですよ……。日当りのいい真昼間の公園のベンチにひとりでじっと坐っていると、ひどく自由なような、それでいてひどくうすら寒いような、妙な気分襲われます。わかりますか？ それがはじまりですよ。あの、ぽかんと晴れ上がった空の下で、誰もいない公園のベンチの上で、あのひどくうしろめたい感じを味わってしまおうと、もう駄目なんです。あとは、御存知の通りですよ。何かむしゅらに一生懸命やらなければいけないと決心していながら、すぐその場から力が抜けてゆくんです……。そうですよ。今となってみると、私も奥さんと同じように考えます。何故だろうって……。何でもないことじゃないかって……。朝出かけて行って、あいさつをして、決りきった仕事をして、さよならって帰ってくるだけのことじゃないかって……。それが何故いやなんだろって……。

女1 ……。

男1 ただね、奥さん、これは御主人のためにも言うんですが、私達に、勇気がなかったなんて考えないで下さいよ。そうじゃないんです。これは勇気の問題じゃないんですよ。

女1 でも、少くとも勇敢だったとは言えませんよ。

男1 いえ、違いますよ、奥さん。だって私達は、苦しんだんですから。私達が、公園のベンチの上で、今日は会社へ行かなければいけないと考えながら、どれほど苦しんだか、誰にも理解してもらえないんです。そうなんですよ、奥さん。もしかしたらその苦しみは、実際に会社へ出かけていて仕事をやるそれより、はるかに大きなものだったんです。

女1 じゃあ、何の役に立ったんです、その、苦しんだのは……？

男1 何の役に……？ いえ……、そうですね、別に、何かの役に立ったというわけじゃありません……。ただ私は、理解してほしいって思ったんですよ、私達が苦しんだことを……。

女1 どんな風に……？

男1 え……？

女1 どんな風にそれを理解しなくちゃいけないんです？ 私に何を理解しろって言うんです？ わかりませんよ、私には。あなた方が何に苦しんだのか。何が苦しかったのか。ええ、さっぱりわかりません。そうでしょうか？ あなたは日当りのいい公園のベンチにただじっと坐っていたというだけのことじゃありませんか。そのどこが苦しいんです。日が当たっていたんでしょう？ あたたかかったんでしょう？ 誰も邪魔をするものはなかったんでしょう？ 結構なことじゃありませんか。

会社へ行こうか行くまいかとして、多少うじうじしてたとしても、それは私の責任ではなくて、あなたの責任です。私が一度でも、会社を休んでくれなんて頼みましたか？ あなたですよ、それは。あなたが自分で休んで、自分でそうなって、自分で苦しんで……、それを理解しろなんて……。みつともないことをいわないで下さい。一体、いくつになったんです、あなたは……？

男1　いくつって……？ 私の年ですか……？

女1　いえ……。 (ゆっくりと我に返る) そうじゃないんです。そうじゃないんですが、私は時々……、そんな風に考えることがあるもんですから……。

風の音。犬の遠吠え……。

男1　(石を見上げて) まだゆれてますね……。でも、落ちることはないんでしょう？

女1　ええ、それは大丈夫だと思うんですが……。寒いんですか……？

男1　え？ ええ……。

女1　何か、はおるものを出しましょうか。あるんですよ、確か……。 (リアカーの方へ)

男1　いえいえ、大丈夫です。それにもう、何ですから……。家内もやってくるころでしょうし……。

女1　でも、その間だけでも……。 (探す)

男1　いえ、奥さん、本当に……。 (立ち上って、女1に近づき) ただ、その……何ですけどね、家内に

は、今の話は内緒にしといて下さいますか……？

女1 どの話ですか？

男1 どのつて……。ですから、私が今日、会社を何したという……。

女1 いいえ、それは出来ません。

男1 だって……。何故です？ そりゃあ約束が違うじゃありませんか。

女1 私、そんな約束していませんよ。

男1 ええ、してはいませんけど……。ねえ、奥さん、お願いしますよ、困るんです……。

女1 (男物のオーバーのようなものを出して) これ、かけて下さい。古びてはいますが、汚れてはいま

せんから……。

男1 (何気なく着せかけてもらいながら) そりゃまあ、どうってことないっていえば、そうなんですが

……、家内は心配性ですし……。びっくりすると思うんですよ。それに、あと、いろいろと……。

女1 いろいろと、何なんです……？

男1 だから……。いいじゃありませんか、私は明日行くっていつてるんですから。行くんですよ、

私は明日。それで総て解決なんです。そうでしょう？ それで、これまでのことはきれいさっぱり

忘れて、私達はつつましく、平凡な生活を送るんです。そりゃあ、はじめのうちは、何だかんだ

と、多少がたがた言われるでしょうけど、それさえ乗り切れれば……。

女1 (ベンチに坐って) 乗り切れるんですか、それは……？

男1 ええ、だって……。

女1 何日休んだんです……？

男1 ……。

女1 今日だけじゃないんでしょう？ もう何日も休んでいるんでしょう？ 手遅れじゃないんです

か、もう……？

男1 何故そんなことを言うんです、あなたは……。今、せっかくその気になったところじゃありませんか……？

女1 ええ、そうです。めっちゃめっちゃにしたいんですか、私のうちを……？

あなたのは、公園のベンチの上でじっと坐っていたのは、私ではなくて、あなたなんですからね。自分でそうしておきながら、つつましく平凡な生活だなんて、虫がよすぎるとは思いませんか……？

男1 ……わかりました。じゃ、どうでしょう、それは私が言いますから、あなたは黙ってて下さいますか？ ね、それならいいでしょう？ 私が言います。その方が、何ですからね……、だってこれは、私の問題なんですから……。

女1 あなたは、言いませんよ。

男1 言います。必ず言います。約束しますよ。だから、今夜じゃないかもしれませんが、必ず……。

女1 何故、今夜じゃないんです……？

男1 いえ、ですからそれは……。

上手から、男2がそそくさと出てくる。

女1 あなた、どうしたんです一体……？

男2 (ぶつぶつとつぶやくように) 何度言ったらわかるんだ、これは、出しちゃいけないって言ったじゃないか……。 (ベンチの上の、サンダルをリアカーの上にしまいこむ)

女1 この人がどうしても見たいっておっしゃるからお見せしたんじゃないですか。それに、しよ  
うがないでしょ、そんなもの。もう特許とられちゃったんですから。

男2 いいよ、置いとけばいいじゃないか、別に……。

女1 (男2の持った熊手を見とがめて) 何なんですそれ？ お酉さまへ行ってきたんですか？

男2 いや、そうじゃないよ、ちよつと何してきてただけじゃないか。

女1 あなた、どこへ行くんです？

男2 だから、ちよつとそこまで、何しとかなくちやいけないんだから……。

女1 もう用意出来てるんですよ。

男2 わかってるよ、それはだから……。すぐなんだから……。大丈夫だよ。(出て行く)

女1 あなた、あなた……。どうするんです、これ……。？ あなた……。

男1 あの……。

女1 うちの人です……。すみません、あなたちよつと、ここ見てて下さいます？

男1 え？ ええ、いいですけど……。

女1 私、行って連れてきます。いつもなんですから、あの人は……。

男1 わかりました。でも、私共ももうそろそろ……。

女1 すぐです。すぐ来ますよ。どうせ、その辺にいるでしょうから……。それから……。、（リアカー

からあなたを出して）これ、ここに置いときますから、もし、その間に来ましたら……。

男1 何ですか、それは……？

女1 ロープを切るんです。

男1 いえいえ、奥さん。それはやめましょう。それはまずいですよ。私は駄目です。だって……。そりゃあ、いけませんよ。

女1 何故……？

男1 何故って……。私はそういうつもりじゃなかったんですから……。困りますよ、奥さん。私は、そういうことは、本当に駄目なんです。

女1 じゃあ、来たら、引きとめておいて下さいます？ そうしたら、私、やりますから。

男1 引きとめるって……。しかし、どうやって引きとめるんです……？

女1 何とかなるじゃありませんか。工夫すれば……。

男1 いや、しかし、どうですかねえ……。

女2が上手から、相変らずものうく子守歌を歌いながら現われ、男1を見つける。

女2 あら、ここにいたんですか……？

男1 ああ、そうなんだよ。さっき、ここ通った時に気がついたんだけど、話しこんでいたもんだから……。(女1に) 家内です……。

女1 こんばんわ。

女2 こんばんわ。

男1 (装置を示して) この……、これを考えついた人の奥さんでね……。ちよつと、いろいろ話しこんでいたもんだから……。

女2 まあ、何なんです、これは……？

男1 だからね、乞食をつかまえるんだよ、これで……。

女2 どうやって……？

男1 その……、だからさ、むこうから乞食がやってきて、そこに寝るだろう。そうしたら、その……、ロープを切るんだ……。

女2 誰が……？

男1 誰がって……。だって、僕じゃないよ。今、そのことで話しあっていただけだね、僕は、その……、困るんだ、そういうことはね……。

女2 何故……？

男1 何故って……。何を言ってるんだお前は……。(女1に) いいですよ。ですからここにいて、来たら、出来るだけ何してみますけど……。なるべく早く来て下さいね。そんなに長い間、ひきとめておくってわけにもいかないかもしれませんから……。

女1 じゃ、お願いしますわ。でも、その間に、奥さんにあのこと話しといた方がいいですよ。ああいうことは、時間をおけばおくほど、話しにくくなるんですから……。

男1 ええ、そりゃあ、もちろん……。

女2 何です……？

女1 あのね、奥さん、御主人があなたに是非お話ししたい事があるんです……。

女2 まあ、何でしょう……？

男1 いや、だからね……。まあ、坐らせてもらえばいいじゃないか、そんなとくに突っ立っていないで……。 (背中の子供を見て) 寒くはなかったかい……？

女2 いいえ、いっぱい着こんできましたから……。

男1 (自分のオーバーに気付いて) あ、これはね、今ちょっと寒かったもんだから、この奥さんにお借りしてね……。僕はいいって言ったんだけど、奥さんが出して下さって……。だから……。

女1 私から、お話ししましょうか？

男1 いえいえ、奥さん、大丈夫ですから。これは、私のことなんですから……。 (女2に) それでね  
……。 (やめて) そうですね、すみません奥さん……。奥さんから話してやって下さいますか……。

(ベンチに坐りこむ)

女1 ……。 (話そうとして、女2に近づく)

女2 この人が、会社に行ってなかったことですか……。？ そのことなら、知ってました……。

女1 知ってましたんですか……？

女2 ええ……。 (男1に) 先月、木村さんがいらして、話して下さいました……。。

女1 だって……。、それでどうしたんです。何故そのことを、この人に話さなかったんです？

女2 怖かったんです……。 どう話していいのか、わからなくて……。

風の音……。 三人とも無言のまま、しばらく間。

女1 私、それじゃ、うちの人探してきます。お願いしますね……。 (去る)

更に風の音……。

男1 だからね、それは大丈夫なんだよ……。ただ、どうしようもなくてね……。

女2 ええ、わかっています……。

男1 そのかわり、あれだよ、明日はね……。行ってみようと思ってるんだけど……。その……。木

村さんは、何か言ってたかい……？

女2 いえ、ただなるべく早く連絡してほしいって……。

男1 なるべく早く……。？ それはどういうことだろう……。？ 二三日うちにつて、そんな感じかな

あ……。

女2 そうね、そんな感じだと思えますけど……。

男1 もっともそれは、先月の話なんだね……。

女2 末でしたよ。お給料いただいたあとでしたから……。

男1 じゃあ、(数えてみようとするが、もちろん数えるまでもない) やっぱり、びっくりするかな、明日

行ったら……。

女2 そうねえ……。ごめんなさい、私、もっと早く言えばよかったんですけど……。言えなくて

……。

男1 いやいや、そうじゃないよ……。そりゃね、その時ちよつと、合図かなんかしてくれたら何だ

ったけど。しょうがないよ。じゃあ、もうやっぱり、駄目かなあ……。明日行っても……。

女2 駄目かもしれないわねえ……。

男1 せっかく、明日は行こうって、決心したところだったんだけどね……。そうなんだよ、今、あの奥さんにも言われてね、明日から出直そうって、そう言ってたところなのさ……。

女2 じゃあ、行くだけ行ってみたらどうかしら？ それで、連絡が遅れたことをあやまれば……？

男1 いやいや、駄目だよ。だって、木村さんは、二三日うちに連絡しろって言ってたんだろう……？

女2 なるべく早くって……。

男1 だから、それは二三日うちについてことだよ。もしかしてそれが四五日うちについて意味だったとしてもだよ、あれからもう、ほとんど一ヶ月たっちゃっているんだから……。

女2 そうかしら……？

男1 そうだよ。四五日うちに連絡しろって言われたのを、一ヶ月もほったらかしておいたら、やっぱり非常識だって言われるよ……。僕は、非常識な奴だなんて思われるのはいやだからね……。

女2 じゃあ、どうします……？

男1 そうなんだよ、それでね……。

女2 会社、やめるんですか……？

男1 いや、だからね……。この人もそうだったんだよ。この……、これを考えついた人もね……。

会社がいやで……。そうしたら奥さんが、そんなにいやならやめたらどうですって……。会社をだよ。そして、あなたの本当にやりたいと思っっていることをやりなさいって。でね、その人は発明家になったんだ……。

女2 発明家に……？

男1 そうなんだよ。その人はね、子供の頃から発明家になりたかったんだ。

女2 でも、発明家って、どんなことをするんです……？

男1 だから、発明をするんじゃないか、色んなものをさ……。毎日、そりゃあよそ目にはなんにもしていないように見えるかもしれないけど、発明のことを考えて暮しているんだよ。その人は……。

女2 (装置を示して) こんなようなことを……？

男1 いやいや、これは違うよ。もちろん、これもその人が発明したんだけど……。どうしてこんなもん発明しちゃったのかな……？ いや、そうじゃなくてさ、もっと便利なもので、特許をとれるようなね……。 (リアカーに、サンダルを探しに行く) だから、特許をとって、それでもうけるんだよ、発明家というのはね……。 (探す)

女2 あなた、大丈夫なんですか、それ……？

男1 いや、今ここにあったんだけどね……。その人が発明したんだよ……。あ、これかな……。

(持ち出してきて) ね、見てごらん。便利だろう。

女2 まあ、何なんです、これ？

男1 だって、サンダルじゃないか。

女2 サンダル……？

男1 だからね……。わかるだろう、こういう風に、こっちからもこっちからもはけるんだよ。とい

うのはさ、お便所なんかには置いてけば、このままこういう風にはいてって、すまして、そのまま出てこられるんだ。

女2 うしろ向きに……？

男1 うしろ向きじゃなくてさ。何を言ってるんだ。だから、こういう風にはいていくだろう？ それで、すまして……、（やや考え）そうか、うしろ向きに出てくるか。いや、だからね、今度は前向きに出てくるのが出来るんだよ。そうして、そのまま脱いでおいても、次の人が、向きを変えずにはいていけるんだ……。

女2 （考えながら）ああ、そうね……。

男1 だって……、わからないかい？

女2 わかりますけど……。でも私、きつと間違えるわ……。

男1 いやいや、間違えるわけじゃないか、だって、極く普通にやればそうなるんだから……。

普通になって……だから、前向きに出てくるほうが普通だろう……？ いや、後向きでもいいんだよ。ね、そうなんだ。これはだから、自由なんだよ。どっちだっていいんだから……。便利じゃないか……。

女2 そうね……。

男1 そうねって……。絶対便利だよ、これは。誰にでもいいから聞いてごらん、みんなそう言うよ、便利だって……。そりゃあそうさ。これまでは、だって、こっちからしかはけなかったんだよ。

それが今度からは、こっちからもはけるようになったんじゃないか。だから、それは、二倍だろう？二倍っていうのはつまり……、これまで便利だったものが、それと同じくらい、もうひとつ便利になっているんだよ、これは……。だからさ、これまでが、便利になっているものが、一とするだろう……？ そうすると、それが、こっちからあれだから……。待てよ……。

女2 毎日、こういうことを考えているんですか、その人は……？

男1 いや、だから、これもそのひとつなんだよ。これ以外にも色々考えているのさ。こういうようなね……。考えてみるとひどく簡単なことなんだけど、簡単なことなんだけど、普段はなかなか思いつかないって、そういうのがいいんだよ。ほら、あれを知っているかい、やかんのふたに小さな穴があいてるの。あれ、大発明なんだよ。特許なんだよ。あれは、凄いお金になったんだ。

女2 その人が発明したんですか……？

男1 いや、そうじゃないよ。それは違う人だけだね。だって、昔からあいてたじゃないか、あの穴は。そうじゃないけど、そういうようなさ……。そういうような何かを考えているのさ、その人もね……。

女2 それで、あなたもなるんですか、発明家に……？

男1 いや、そうじゃないよ……。そうじゃないんだけどね……。僕にはだって、才能もないし……。それに、お金もね……。やっぱり、これはじめるとなると……。暫くの間は……。もちろん、暫くたって、それほどでもないかもしれないけど……。何か発明するまではとにかく、収入がない

んだから……。

女2 それ……、どのくらいです？

男1 どのくらいですって、何が……？

女2 収入がないのは……？

男1 そりゃあ、だって……、何か発明しなくちゃしようがないんだから……。でも、何とかなるのかい……？

女2 あなたが、本当にそれおやりになるんですしたら、何とかしなくちゃしようがないじゃありませんか。あなたが、それでやってくって言うんですしたら……。

男1 いや、やってくなんて言ってもやしないじゃないか。そうじゃなくてね……。そういうのはどうだろうって、だから……。才能の問題もあるしさ。もちろん、その才能のことはね、何とかなると思うんだけど……。というのはね、これは、才能っていうより、思いつきだからね……。素人がふと思いついたっていう……。そういう発明が多いんだよ。たとえば、主婦だとかがさ、炊事をしながらね……。だから、これは始めるとすれば、お前にも協力してもらおうことになるかもしれないよ。いやいや、まだは始めるって決めたわけじゃないけど……。

女2 でも、はじめるんですしたら、早いほうがいいんじゃないですか？

男1 うん、そうだね……。早いほうがね……。そうなんだよ……。僕もね、昔一度だけ、やってみたことが……。ないわけじゃないのさ……。言わなかったけど、子供の頃ね……。エジソンなんか

を読んで……。エジソン、知ってるだろう……？

女2 いいえ。

男1 お前、エジソンを知らないのかい？ だって、大発明家だよ。ドイツの……、ドイツじゃなかったかな……？ どこか外国のね……。色々発明してるじゃないか、だから、有名なのはね……。えーと、何だったかな……。色々あるからね……。ほら、あれは知ってるだろう？ 何か発明に夢中になって、卵ゆでるつもりで時計ゆでちゃったって……。あれは、ニュートンだったかな……。いやいや、エジソンのはずだよ確か……。あの時、あいつが発明しようとしてたのは、何だったろう……？

風の音……。

女2 じゃあ、あなたも子供の頃、発明家になりたいと思ったことがあるんですね……？

男1 そうなんだよ……。それはね、本当のことなんだ……。あの人も、そうだって言ってたけど、僕もね……。

女2 (あまり期待せず) それなら、もしかしたら、うまくいくかもしれないじゃないですか……。

男1 (力なく) うん……。

女2 やってみたら、どうなんです……？

男1 (あたりを見て) ずいぶん、遅いなあ……。どうしたんだろう……。

女2 あなた、おやりになるんですしたら、私はかまいませんよ……。

男1 そうだけどね……。

女2 自信ないんですか……？

男1 いやいや、そういうあれじゃないよ……。それに、実はもう、考えてることだってあるんだけどね……。

女2 もう発明したんですか……？

男1 いや、もうって……。前にね、ちょっと考えたことがあるんだよ。そりゃ、もちろん、駄目だけどさ。駄目だろうなって気はするんだけども……。

女2 どんなのです？

男1 うん、駄目だと思うんだよ、それはね。考えてみると、どうも、だから……。

女2 言ってみて下さいよ。

男1 いいけど……。だからね……。爪楊枝の先っぽに、味の素しみこませるんだよ。

女2 何ですって……？

男1 だからさ、爪楊枝の先っぽにね、味の素をしみこませるんだよ。

女2 そうすると、どうなるんです？

男1 どうなるんですって……。そうすれば歯をせせくる時においしいじゃないか。

女2 ……。

男1 だって、味がするだろう？

女2 わかりましたけど……、そういうんですか、発明っていうのは……？

男1 そうだよ、そういうのが発明なんだよ。お前はそういうけど、そんなに悪いあれじゃないよ、これだって……。こういうのを基礎にして、少しずついいものに改良していくんだから……。そりゃあ、自動車を発明したり、飛行機を発明したりすることだってあるけどさ、そういうのはもうみんなやっちゃってるじゃないか。

男2が、下手からふらりと現われて、サンダルを見つめる。男1は気付かない。

男1 だから、僕達はこういう、ちよつと人の気付かない……。 (男2に気付いて) あ、あの、これ

……。 (サンダルを慌ててしまう) そうじゃないんです。そうじゃなくてこの……。、あなたが発明なさったという話を話したもんですから……。 (男2に渡す)

男2 これは駄目なんです。(受け取って、再びリアカーの中へしまおう)

男1 ええ、それはうかがってたんですけどね、こいつが是非拝見したいって言うもんですから……。

この人なんだよ、今の、発明した人はね……。家内です。

男2 どうも……。

女2 こんにちはわ……。

男1 あの、奥さんにお会いになりませんでしたか？ 今そちらの方へ、探しに行かれたんですが……。

男2 いえ、私はちよつと、用を足しておりましたから……。えーと、そうだな、もう一度行ってこなくちゃいけないところがあるんですが、すみませんが、家内が参りましたら……。

男1 いえいえ、それは困ります。あなた。だって、私達はもう、帰らなくちゃいけないんですから……。

男2 ええ、大丈夫ですよ。持つてかれるものもありませんし、家内もすぐ来るでしょうから……。

男1 待つて下さい。駄目ですよ、あなた。奥さんだって、あなたを探してらしたんですから……。

男2 すぐですよ。私だって、ちよつとそこで何して、すぐ来るんですから……。

男1 それじゃ、いつまでたっても私達、帰れないじゃありませんか。子供もいるし、寒い中で……。

(着ているオーバーに気付き) あ、すみません。(脱いで) これ、奥さんにお借りしてたんですよ、お返しします……。 (渡す)

男2 ああ、いいんですよ、こんなもの、いつでも……。 (受け取って、リアカーの方へ……)

男1 (女2に) じゃあ、行こうか……？

女2 でも……。

男1 いいんだよ、あの人がいてくれるんだから……。それに……。だからあの話は家にかえってか

らゆっくり考えてみれば……。

女2 いえ、そうじゃないんですよ……。

男1 何だい……？

女2 ごめんなさい、言えなかったんですけど、今夜帰ったら、大家さんにお家賃払わなくちゃいけないんです……。

男1 家賃を……？ だって……。

女2 約束してあったんですよ。今夜、お給料が出ますから……。

男1 お給料が出ますから……、それはでも、あれじゃないか……。

女2 ですから、知ってましたけどね、先月からですから……、しようがなくて……。

男1 それはしかし……、どうなんだろう……？ まあ、いいじゃないか、行きながら話せば……。  
ここじゃ、何だから……ね？

男2 ニヶ月分ですか、ためたのは？ あ、いや、失礼……。ただ、何ですよ、ニヶ月だったら、平気です。私も、そういうことを少し研究したことがありますね、知ってるんですが、ニヶ月だったら何でもありません。もちろんその……、約束したのはね、あれですが……。

男1 はっきり約束したのかい……？

女2 ええ、ですから……、日を決めてくれてって言われて……。

男1 まあ、でもしようがないよ……。ちよつとのばしてもらって……。だって、大丈夫なんだから

……。

女2 もう、何度も何度も、のばしてもらったんですよ……。

男2 もし何でしたら、少しだけ払っておくとかですわね……。

女2 ……。

男1 ……。

男2 ああ、そりゃそうですね。そりゃあそうさ。つまり、今日があなたの給料日なんですか？

男1 ええ、まあ、そうですね……。

男2 いや、わかってます。それは、わかっていますが……。じゃあ、こうしたらどうですか、それが

盗られちゃったんです。

男1 泥棒にですか……？

男2 ええ、ですからね……。帰りにデパートで買物をしようとして……。あ、それより、落したこ

とにしましょう。その方が自然でしょ。だから、そうすれば、遅くなった理由にもなるじゃありませんか……。

せんか……。奥さんと二人で、公園中を探しまわったんです……。

男1 まあ、そうですね……。

男2 だって、それはあり得ることですよ。そういうことが、絶対にないなんて、言えないですから

……。現に私も、そうしたことがあるんです。いや、この時は本当に落したんですよ。本当に……、

事実落したんです。もっとも、家内はそう思っていないんですがね。これは、本当だったんです。

だから、本当の時の方が、むしろ困るんですよ、こういうことは……。

男1 ……。

女2 ……。

男2 大丈夫ですよ。最初はそりゃあ何ですが、やってみれば意外に簡単なことなんです……。

男1 (女2に) どうする……？

女2 ですからね、あなた、あのことをこの方に話してみたらどうかしら……？

男1 あのことって……？

女2 ですから、あなたの考えた……。

男1 いや、駄目だよ。そりゃ駄目だって。それに、あれが何とかなるにしても、すぐってわけには

いかないんだから……。

男2 何です……？

女2 いえね……。

男1 (女2に) およし。(男2に) あれは駄目なんです。もう少し何とかしないと、だから……、そう

してからお話しますよ。

男2 何の話なんですか……？

女2 この人、発明をしたんです……。

男2 発明……？ あなたもやってるんですか……？

男1 いえ、私のはただ、思いつきなんですけどね……。

男2 思いつきですよ。最初のうちはみんなそうなんです。で、どんなものです、それは……？

男1 ええ、ですけどこれは……、駄目だと思っただけなんですけどね……。

女2 ですから……。

男1 いや、いいから……。だから、いいよ、僕から話すから……。その……、爪楊枝がありますでしよう、その先のところに、味の素をしみこませるんです……。

男2 ははあ……。

男1 やっぱり……。いけませんか、これは？ (女2に) だから、そうなんだよ、これはね。このま  
まじゃ駄目だよって、言つといたじゃないか。

男2 あるんです、同じようなものが……。

男1 あるんですか……。？ やっぱりね……。どうも、そうじゃないかって気はしてたんですけど  
……。

男2 香水を浸みこませたものもありますよ……。

男1 香水をね……。 (女2に) だからね、そうなんだよ。みんな同じようなことを考えているんだか  
ら……。だって、僕はさつきからそう言ってるだろう？ 駄目なんだよ、それは。そんなものは、  
だって……。發明家はうようよしてるんだからね……。絶対に駄目さ、決まってるじゃないか……。

(男2に) そうなんですよ。私はさつきからそう言ってたんです。これは駄目だよってね……。 (女

2に) そりゃあそうだよ、そんな……、爪楊枝に味の素しみこませるなんて……。

男2 しかし、味の素っていうのはなかったかなあ……。

男1 ……。

女2 ……。

男2 味の素ねえ……。

男1 ……そうなんです。それが、この発明の、あれなんですけどね、味の素っていうのが……。

男2 うん、それはなかったかなあ……？

女2 それじゃ、何とかなるんですか、それは……？

男2 何とかなるかって申しますと……？

女2 ですから、私達、お金が必要なんです……。

男2 あなたがた、それをお金にしようとしているんですか……？

男1 いえいえ、そうじゃないんです。そうじゃないよ、お前……。そうじゃなくて、ただ、特許を

ですね……。

男2 お金のために発明をやってらっしゃるんですしたら、おやめになった方がいいですよ。発明っていうのは、そういうものじゃないんですから……。

男1 もちろん、そうです。だから、私達もそうですよ。発明ってものは、そういうものじゃないんです。だから……。

女2 お金にならないんですか……？

男1 だから……、言っといたじゃないか、そういうもんじゃないって。だから、それは、これが軌道にのればね、何とかつつましく生活するくらいのは出来るかもしれないけど、そんな一攫千金みたいなあれはね……。

男2 それも無理でしょうね。昔から、生活らしい生活をしてた発明家なんていませんよ。

女2 でも、それじゃ……。

男1 いやいや、だからさ、それは極端な例なんだよ。

男2 だって、現に私を見て下さい。もう今夜から帰るうちもないんですよ。(リアカーを指し) ああして、あちこち、ほつつき歩きながら暮すんです……。

男1 しかし、何じゃないですか、そりゃそうでしょうけど……、今に何かひとつでもものにすれば、何とかなるんでしょう、そんな、ぜいたく言わなければ……？

男2 いいえ。駄目ですね。それに、そんなこと考えていたら、発明なんて出来ませんよ……。発明っていうのはあなた、もっと純粋な行為です……。

男1 わかりますけど……。だって、あなた、奥さんにはそうおっしゃってないじゃありませんか。今になんとかなるって……。

男2 そりゃあ、家内にはそう言いますよ。そう言わなければ、耐えられませんからね、こんな生活には……。

男1 だから……、私も今、家内にそう言ってるんじゃないありませんか……。

男2 あ、そりゃそうですね……。

男1 (慌てて女2に) いやいや、だから、そういう意味じゃないよ。そういう……、だから、お前をだますとか、そういうことじゃないんだからね……。 (男2に) だって、そうでしょう……？

男2 そうです。えーと……、そうですね、そういうことです。

女2 ……。

男1 いやいや、だから……、まだ発明家になるなんて言ってやしないじゃないか。そうだろう？

僕はいやだって言ったんだよ。そうだったじゃないか。僕はだから……そういうことを知ってるからさ。発明家の、そういう色々なね……。そうなんだよ。発明家になるなんていうのは、これは、なみたいいていのことじゃないんだから……。そんな……。一朝一夕に……。一攫千金みたいな……。そんなあれじゃね……。知ってるんだよ。知ってるからさ……。だから、やめようって……。

風の音……。ひたすら、風の音。……下手から、ぼんやり、男3が現われる。乞食である。

男1も男2も、とっさにそれぞれ何ごとかしなけいけなけいと思いつつながら、何をどうすべきか、思いつかない。男3、ぶらぶらとやってきて、女2に会釈をする。女2もそれに返す。男3、敷いてある蒲団を不審そうに見ながら、上手に消える。

男1 えーと……、(男2に)あの……。

男2 ええ……。

男1 行ってしまいましたよ……。

男2 (ようやく事態に気付いて) ああ……、今のあれがですか……？

男1 そうなんです、だから……。私、そう言われてたんですが……。あなたがいらしたから……。

男2 私が……？

男1 ええ、ですから、奥さんに来たら引きとめておくように、言われてたんですよ……。でも……、

あなたには教えましたでしょう、今……。

男2 ええ、まあ、そりゃそうですね……。しかし、今の、そうでしたか……？

男1 と、思いましたけど……。じゃなかったかなあ……。 (女2に) お前、知ってるのかい？

女2 いいえ。ただ時々、公園で会ったことはありますけど……。

男1 だって今、あいさつみたいなこと、してたじゃないか……。

女2 ええ、この子にお菓子くれたりなんかするんですよ。

男1 お前、およしよ、ああいう人からものをもらうのは……。だから、そうなんだろう。今のは、

公園の……？

女2 そうですよ。いつも、あの掃除用具の置場のところで寝てるんです……。

男1 (男2に) じゃ、やっぱりそうなんですよ。どうします……？

男2 どうしますって……、だって、しようがないでしょう、行ってしまったんですから……。

男1 そうなんです。だから、それはしようがないんですけどね……。ただ、私はそう言われてたもんですから……。

男2 それに、引きとめるたって、一体どうやって引きとめるんです……？

男1 ええ、ですから、私もそう言ったんですが……、奥さんは、何とか工夫するようになって、そういう……。

男2 で、何か工夫がいたんですか……？

男1 いえいえ、ですから、私は駄目だって、そういうことは、その……。

女1、現われる。

女1 あの……、今、来ませんでした……？

男1 いえ、ですから、あの……。

女1 逃がしちゃったんですか？

男1 そうじゃないんですよ。そうじゃなくて、私達はここで、こういう風にしていたら、ちょうどその辺から、こういう風にきて……、だから、私は言いましたよ、御主人に……。ほら……。

あの……、そうですよって……。

女1 私、ずっとつけてきたんです。あそこの、お風呂屋の裏で見つけて……、寝てたんですけど、起きるのを待って……。

男2 まあいいじゃないか。今、そういうあれじゃないんだから。そうなんだよ、今この人達はね、それどころじゃないんだ。そういう話をしてたんだからね。だから今、私も、そっちに何するあれがあったけど、やめて相談に乗ってやってるところじゃないか。この人達はね、家賃が払えなくなっって、今夜うちに帰ることが出来なくなっってしまったんだよ。そうでしょう？

男1 ええ、ですから、それはあの……。

男2 だいぶたまっちゃって、大家さんに何べんもさいそくされたんで、奥さんもしようがなくて今夜必ず払いますって、約束してしまっただよ。それはしようがないよ。誰だっって、そこまで言われたら、約束するよりしようがないじゃないか。

女1 もう、延ばせないんですか……？

男2 延ばせないんだよ。色々細かい話を聞いたけどね、どうも延ばせそうもないね。

女1 だから、落したとか何とか言っ……。

男2 もう話したんだって。そういう話はもう全部やって、駄目だっ……ことがわかったんだから……。

女1 じゃ、どうするんです……？

男2 それなんだよ。だからね、今そのことを相談してるんじゃないか……。

男1 ただ、何ですけどね、絶対に延ばせないかどうかって……。(女2に) ねえ、どうなんだろう……？

女2 私、もうあそこへ帰るのはいやなんです……。

男1 帰るのがいやだって言ったって……。だって、それじゃ、どうするんだい……？　だって、それじゃ、どうしようもないじゃないか……？

女2 でも私、もうどうしても、帰るのはいや……。

男2 (女1に) ね、だからね、言っただろう？　そうなんだよ。だからこれは、話しあわなくちゃ、どうしようもない問題なんだから……。

女1 (女2に) でも、それじゃ、何ですよ、ね、奥さん。お子さんもいらっしやるんですし……。

女2 子供は大丈夫です。子供のことは私、責任を持ちます。ですから、どうでしょう……何ですけど、あなた方とご一緒させていただきませんか……？

女1 いえ、だって、私達もないんですよ。私達にも住むところはないんです。

女2 ええ、うかがいました。でも、いいんです。私、こうして、御一緒させていただけるだけでいいんです……。

男2 ……。

女1 ……。

男1 ただね……、だからそれは、わかるけどさ……。だけど……ね、そうだろう……？　その子を

お風呂に入れたり、寝かしたり……ね、風邪ひいたりなんかしたら、あれだろう……？　ね、そう  
なんだけどね……。だから、その……、どうなんだろう……？　そんなに物分りの悪い大家さんで  
もないんだし……。

女2　あなた、もしお帰りになるんでしたら、それでも結構ですよ……。

男1　そういう……、そんなあれじゃないじゃないか。そんな、お前、ないよ、言い方は……。だか  
らね、だから、それならいいよ、大家さんには、僕から言うからさ。ね、それならいいだろう？

だから、一緒に行くだけは行って、言うのは、僕がやるからさ。落したことにして……。ね、今  
この人達が言ったみたいに……。？　それなら大丈夫だろう？　大丈夫だよ。大家さん、いって言  
うよ。ね、僕が言うから、それは……？

女2　私、もう帰りません。決心したんです。もし、こちらの方さえ、いって言って下さるんでし  
たら……。

男2　そりゃあ、私共は……。、何ですよ……。　(女1に)　ねえ、お前……。

女1　……。

男1　だけど、もしそうするんだとしても、このままってわけにはいかないよ。だって、荷物だって  
取りにいかなくちゃいけないし……。

女2　何もないじゃありませんか。

男1　何もないって言ったって……。、でも、少しはあるよ。あれあのままにしとくのは、だって、も

つたいないよ……。

女2 お家賃払ってないんですし……。

男1 そりゃ、払ってないけれどもさ……。あの、時計もそうするのかい？

女2 もう壊れてます、あれは……。

男1 壊れてるけど、直せばまだ使えるんだよ。それにあれは、吉田さんにいただいた、あれじゃな

いか。記念のものだよ。(女1に) 結婚した時に、世話してくれた人が贈ってくれたもんなんです。

だからそれは、そんなに高価なものじゃないんですが、記念のものなんですよ。そういうものです

からね、そういうものは、やっぱり……。それに、子供のものだとか……。ほら、あれだってそう

じゃないか、その時お前が、何とかいうあれにもらった、対のスプーンの……。あれ、銀だよ……。

女1 あなた、本当に私達と一緒に来るつもりなんですか……？

女2 ええ、もし、よろしければ……。

女1 そりゃ、私達は構いませんけど、でも、私達にも、なんにもないんですよ。いえ、持物のあれ

を言ってるんじゃないですよ。どこへ行って、何をしようとか、そういうことが何もないんです

……。

女2 ええ、わかっています……。

男1 わかってないんだよ、お前は……。お前はなんにもわかつちやいないじゃないか……。だって、

そうだろう、あれはどうなんだい？ この子が生れた時にもらった、ケーブがあったじゃないか。

あれ、一度も使ってないんだよ。箱に入れたままじゃないか……。それだってお前、贈ってくれた人のこと考えてごらん……。

女1 私、毎日考えてたんです……。あの部屋に坐って、この子を抱いて、この人の帰りを待ちながら……。もうどうしようもないんです……。もう……。、どうしようもないんですよ……。そんなことを、これから一生、毎日毎日続けるのかと思うと……。

男1 だからさ……。明日僕は必ず、会社へ行くよ……。ね、さっきもそう言ったじゃないか、そうするよって……。

女2 いいえ。この人は駄目なんです。これがはじめてじゃないんですから……。もう何度も、会社をやめているんです……。その度に、私、あれしましたけど、もう私……。

男1 ……。

女1 ……。

男2 ……。

上手にぼんやり、男3が現われる。手に、赤んぼうの持つ、おしゃぶりを持っている。

男3 あのこと……。

女をのぞいて、みな立ち上り、やや気圧されて……。

男3　こんばんわ……。

全員　こんばんわ。

男3　（おしゃぶりを出して）これ、公園のベンチの下に、落ちてたんですが、奥さんのものかと思いまして……。 （近づいて）

女2　あ、そうです……。 （受け取る） どうも御親切に……。

男3　いえ……。 あれですから、水道のところで洗っておきましたから……。

女2　それは、本当に、どうも……。

男3　じゃあ、あの……。

男3、やや心を残しながら、再びぼんやりと去る。立ち上った三人、男1を残してそれぞれ、坐る。

女2　ですから、お願いです。私を、ご一緒させて下さい。なんにもしなくてもいいんです。ただここに、こうしてじっとしているだけで私、気が安まるんです……。

男2　それならね……。 いや、だからさ、なんにもしなくていいって言うんだから……。 そりゃあ、色々あるけども……。 ね、ともかく、そういうことなら……。

女1 そりゃそうですけどね……。私達、本当に、ここで今夜これをやったら……。あと、なんにもないんですよ。どこへ行ってどうしようって、そういうこと、なんにもないんです……。

女2 ええ、私、これお手伝いします……。

男2 いや、まあ、それはいいじゃないですか……。しかし（男1に）あなた、どうします……？

男1 どうしますって……。だから……。

風の音……。

女2 もし何でしたら、あなたも、お願いして、ご一緒させていただいたらいいじゃないませんか……。

男1 うん……。

女2 私、ですから、さっきああいう風にいいましたけど、あなたが一人で帰った方がいいなんて思ってたわけじゃないんですよ……。ただ、私がそういうのはいやですって言っただけなんです……。

男1 だから、わかってるよ……。それは、わかっているけどね……。だから僕は、時計のことだとかさ……。まあ、あれはいいけど……。記念のものだから……。そう思っただけなんだから……。

女2 ね、ですから、あなたからもお願いして……。

男2 いやいや、お願いだなんて、それほどのことじゃないんですから……。

女2 でも、ね、そうした方がいいですよ、あなたから……。

男1 じゃあ、まあ、そういうあれですから……。何とか……。

男2 わかりました……。 (女1に) ね、いいじゃないか、お前……。ただ、いるだけなんだから……。

女2 ええ、私はもう、別に……。

男2 よし、それじゃ、まあ、それはそういうことにして……。一応、どうでしょう、どうってこと

もありませんが……。何とかこう……。たとえばですねえ、これからどうしようとか……。そうい

うようなことをあれしましょうか……。いや、だからですよ、そんなに具体的に何かっていうこと

じゃなくてですね、一人一人がこの……。何ていいですかね、こうしたいとか、ああしたいとか

……。

女1 そうですけどね、ともかく当面、赤ちゃんがいるんですからね、そのことを考えなければいけ

ませんよ……。

女2 (装置を指して) これ、やらないんですか……？

男2 いやいや、まあこの際ですからね、これはこれであれして……。 (女1に) だから、あれだろう、

赤んぼのことを何とかしなくちゃいけないって、そういうことなんだろう？

女1 そうですよ。あなた、少し落ち着いたらどうなんです。これは、そういう問題じゃあないんで

すから……。

男2 落ち着いてるよ。落ち着いて、だから、赤んぼのことを何しようって言うてるんじゃないか……。

女1 あなたは知らないかもしれませんが、赤ちゃんというのは、これは大変なんですよ。一日一回必ずお風呂に入れないといけないし、食べるものだって、普通のあれじゃいけないんですから……。

男2 だから……、そうだろう？　そういうことのを、色々何しようって言うてるんじゃないか……。

男1 あの……、あるんですけどね、それは……。いえ、うちへ行けばの話ですが……、そういう子供の色々なあれが……。いえ、もちろん私、みなさんとご一緒させていただくの、いやだって言うてるんじゃないんですよ。そうじゃなくて……、ただ、あるんですから、そこには……。ね、これはやっぱり、考えてみる必要があるんじゃないんですか……？　と、言うことはですよ、どうなんでしょうか、この……。みんなと一緒に帰るんです……。だって、そうでしょう？　みんなと一緒に住みます、あそこに……。ですから、大家さんにはちよっと話して……。だって、絶対駄目って、そういうあれじゃないんですから……。これは……。

女1 ……。

男2 ……。

女2 (立ち上って) 私、行って連れてきましようか……？

男1 連れてくる……？

女2 今の人です。私、いるところ知っていますから。

男2 しかし、あなた……。

女2 これ、おやりになるんでしょう……？

男2 ええ、そりゃ、まあ、そうなんですけどね、今は、とにかく……。

女2 いつも、掃除用具の置場のとこに寝ているんです。ですから、今夜もきつと、そこにいると思

いますけど……。

女1 でも、あなた、どうやって連れてくるんです……？

女2 どうやって……、ちよつと来て下さいって言えば、来てくれると思うんですけど……。

男1 お待ち、お前……。今、そういう話じゃないんだから……。 (女1と男2に) ね、たとえ三日だ  
つていいじゃありませんか、現にそこに使える部屋があつて……。

女2 おやりにならないんですか……？

女1 いえ……、やりますよ。 (男2に) そうなんです、あなた……。

男2 そうだよ。そうなんだけどね……。でも……。

女1 何なんです、やめるんですか……？

男2 いやいや、そんなこと言つてやしないじゃないか。ただ、来るかどうか、わからないからね、  
それを考えてるんじゃないか。それに、あれだよ、たとえ来たにしてもだよ、それからどうするん

だい？

女1 じゃあ、あなた、やめたいんですね？

男2 だから、そんなこと言ってやしないじゃないか。一言も言ってないよ、そんなことは。何を言ってるんだ。ただ、来た時にどうすればいいかなって、考えてるんじゃないか。そうだよ。そういうことをあれして、ただ来てもらっても……、あと、恥かくだけじゃないか……。

女2 私、言います、それも……。ここに寝るように言えばいいんですね……。

女1 そうなんですけどね……。 (男2に) あなた、いいんですね、そう言ってますよ……。

男2 いや、それで、寝てくれれば、そうなんですが……。

女2 ともかく私、連れてきます……。 (上手へ)

女1 ちょっとお待ちになって、あなた……。

女2 大丈夫です。私、必ず連れてきますから……。 (去る)

女1 (男2に) あなた、大丈夫なんですわ、私は知りませんよ。あの人、必ず連れて来ますから……。

男2 だって、しょうがないじゃないか、そういうあれなんだから……。

女1 あなたがそうならいいんです……。

男2 何を言ってるんだ……最初はお前、自分で絶対やるんだって……。

女1 私はやりませんよ。ただ私は、あなたの決心を聞きたかったんです……。

男1 まあ、いいじゃありませんか。大丈夫ですよ。ですから、どうでしょう、今のうちに、あれ考

えときましようよ。ね、考える価値ありますよ、あれは……？ あるんですから、そこに……、使える部屋……が。道具だって、たいしたことはありませんけど、一応整っているんです……？ たとえ一晩だっでもいいじゃありませんか。明日の朝、大家さんに出て行って言われたら、その時出てくればいいんです……。

男2 (女1に) 来やしないだろう？ だって、来いったって、ただそれだけで来ることはないよ……。

女1 来ますね。私は来ると思います。あの人は、連れて来ますよ……。

男1 まあまあ……。いいですか、私はね、一晩部屋の中で寝たいからって、そんなことを言ってるんじゃないんです。そうなんですよ。道具なんです。あいつはああいうこと言ってますが、あるんですから、色々……。ね、それ、みすみす置いとくことはないでしょう……？ 一度帰れば、それ持って来れるんですから……。全部じゃなくても、だから、子供のものだけでも……。

女1 やめるんなら、今のうちですよ……。

男2 よせって、馬鹿。そういうことは言ってやしないじゃないか……。

男1 ねえ、どうなんですか……。じゃあ、こうしましょうか、ね、もし何でしたら、帰るとかそういうことじゃなしに、道具だけとりにゆくんです……。それでもいいですよ、もう大家さん寝てるでしょうからね……。だから、あの……、階段を上る時だけちよつと注意すれば……。それで、この……、出来ればリアカーをお借りして……、ね……？ 子供のものだけでも取ってこなければ、もう、すぐにも困るんですから……。

女1 あなた、本当にやるつもりなんですか……？

男2 本当について……、だから、そうだよ……。

女1 やめたいならやめたいって、何故正直に言わないんです。

男2 何故って……、だから、言ってるじゃないか……。いや、やめたくはないよ。やめたくはないけど、この際だからって……。だから、この人が今説明してるように、そういうこともあるから……。

女1 ごまかすのはよして下さい。あなたは最初からやるつもりはなかったんでしょ？

男1 まあまあ、ね、いいじゃありませんか、それは……。

女1 すみません、ちょっと黙って下さい、私達のことですから。そうでしょう？ あなた、最初からやるつもりはなかったんですね？

男2 いや、そうじゃないよ……。最初はそれはあれだったよ……。そうだったけど、考えているうちに、お前がどんどん……。あれしてしまうから……。

女1 だからどうなんです？ だからどうだって言うんです。私のせいだって言うんですか？

男2 そんなこと言ってやしないじゃないか。

男1 まあ……、あの……。

女1 何故最初からあなたは、そういうことを言わないんです？ そうでしょう？ 最初からいやならいやって言えればいいじゃありませんか。それを、こんなにまでなってから……。いいえ。違いま

すよ。私は、あなたへのいやがらせのために、こんなことしたんじゃないよ。ここまでやったら、もしかしたらあなたがその気になるかもしれないと思って……、あなたに、そうなって欲しいと思って、やったんです。そうですよ。だから私、あなたが本当にやるって言うなら、構いません。やりますよ、私だって。今になってもまだぐずぐずしてるから、そう言うんじゃないよ。構いませんか。そうでしょう？

男2 いや、だからね……。

女1 もう、言いわけはよして下さい。じゃあ、やらないんですね……。

男2 まあ、だから、そうなんだけどね……。

女1 最初からそのつもりだったんですね……？

男2 そう……、だよ。

女1 作っている時に、途中から逃げだしたのも、そのせいですね……？

男2 ああ……。

女1 (男1に) そうなんです……。この人はね、いつもそうなんですよ……。

風の音……。上手から、女2が男3を案内して、ゆっくり現われる。

女2 (寝床を示して) ここです……。

男3 ここに、寝てもいいんですか……？

女2 (掛け蒲団をめくってやり) ええ、さあ、どうぞ……。

男3 そうですか、どうもすみません……。 (寝床に入って、他の人々に気付き) でも、みなさんは……？

女2 いいんです。すぐ、ほかへ行きますから……。

男3 では、遠慮なく……。 (横になる)

女2 (蒲団をかけてやり) おやすみなさい……。

男3 おやすみなさい……。

女2 眠れそうですか……？

男3 ええ、もう、ここでしたら……。

女2、寝床をはなれて、三人のいるベンチに近づく……。

女2 もうすぐ、眠ります……。

男1 しかし、お前……。

女2 いいんです、あの人のことは、私、知ってますから……。

女1 でもね、あなた……。今、ここでちょっと、相談してみたんですけどね、私達には、赤ちゃんがいるんですよ……。

女2 いえ、子供のことは心配しないで下さい……。

男1 だって、心配しないってわけにはいかないよ、子供なんだから……。

女2 子供は、もういません……。

男1 いませんたって、お前、そういうわけにはいかないんだから……。

女2 死んだんです……。

男1 死んだ……？

女2 (淡々と……) 三日前です……。その前に、様子がおかしくなって、お医者さまに見せました

……。そうしたら、栄養失調だって言われました……。栄養失調というのは、飢え死にのことなん

だそうです。そうです。うちの子は、餓死したんです……。 (無意識に背中をゆすりながら)

男1 ……。

女1 ……。

男2 ……。

女2 (男1に) 三日前ですよ。あなたは、気付かなかったんです……。いつか、気付いてくれると思

っていましたけど……。駄目でした……。ただ……。 (男3を示して) あの人は、知っていました……。

話をしたことはないんですけど、あの人だけは、気付いていました……。

男1 ……。

女1 ……。

男2 ……。

女2 でも、そのせいじゃないんですよ、私がこんなことをするのは……。そのせいじゃありません……。それに、あの人も知っています、そうじゃないってことを……。そうなんですよ、あの人は知っているんです、今、何故あそこに寝ていなければいけないかって……。あの人は、知ってて、ああして寝ているんです。

男1 ……。

女1 ……。

男2 ……。

女2 (ナタを見つけて) これですね、これでこのロープを切れればいいんですね。いいです、私がやります……。

女、ナタで電信柱のロープを、切る。男3の上に、石が、ゆっくりと落下してくる。長い長い悲鳴……。そして風の音……。

女2 (ゆっくりと、むしろに近づき、男3のかたわらにうづくまる) 私、ここにいます。あなたがたも、ここにいて下さい。いいんです、何もしなくても……。もうすぐ誰かが通りかかるでしょう。そうしたらきつと私たちが何故ここにいるか、わかってくれます……。

風の音……。

(注)

なお、作中にある《前後よりはけるサンダル》のアイデアは、星新一氏のものであり、《味の素をしみこませた爪楊枝》のアイデアは、筒井康隆氏のものであることを、ここにお断わりし、利用させて頂きましたことを、深く感謝致します。